

自然災害への備え

～東日本大震災から私たちが学ぶこと～

災害を忘れる前に

東日本大震災の発生から7カ月が経過しました。

阪神淡路大震災の発生からは15年、新潟県中越地震の発生からは6年が経過しました。

どこか「人ごと」に思っていた大災害は、いつ、どこで起きるか分からない「我がごと」となりました。

東日本大震災では、現在も避難所生活を余儀なくされている被災者が多くいますが、被災地は復興へ向けて一歩ずつ前進しています。

しかし、復興が進み、時間の経過とともに私たちの中間では、災害への危機感が薄れてきているのではないのでしょうか。

今後30年以内に60%の確率で発生するといわれる南海地震による被害を最小限にとどめるため、私たちは被災地から多くのことを学び、一人一人が早急に防災対策を講じなくてはなりません。

10月2日、四国沖を震源とするM8.4の地震が発生、町内では震度5強を観測し、国道439号栗生トンネル付近および京柱峠付近で山側崩壊のため通行不能となり西峰地区が孤立したことを想定し、西峰地区自主防災会、大豊町消防団が綿密な連携のもと、防災訓練を実施しました。

西峰地区自主防災訓練



要援護者の避難支援訓練



嶺北消防署による消火訓練

大規模な災害が発生した場合、消火、救急、救助などの要請が殺到することが予想され、防災関係機関の対応には限界があります。このような時に、地域の皆さん自らの手による初期消火活動や被災者の救出救護、避難誘導、避難所の運営など自主的な防災活動の重要性があらためて認識されました。

町が災害応急対策を適切に実施するためには、迅速かつ的確に被害情報を収集する必要がありますが、町が独自に行う被害情報収集活動には限界があります。そこで、地域の被害情報の伝達や、避難所を開設運営するにあたって、町と自主防災組織との連携が被害を最小限に抑えることができるのです。



県防災ヘリによる支援物資搬送訓練



炊き出し訓練



電話が使えないことを想定し連絡は全て無線で行いました